

3. 加西市の歴史文化の特徴

1章の「加西市の歴史文化の成り立ち」、2章の「加西市の歴史文化遺産の概要と特徴」を踏まえると、加西市の歴史文化は、次のように整理できる。

加西市は、加古川支流の万願寺川や下里川が形成する段丘面に農村集落が形成されると共に、青野ヶ原台地・鶉野台地等の播磨内陸地域最大の平坦地にも集落がつくられてきた。

古代には、播州平野の段丘面や広大な台地がつくりだす風景は「播磨国風土記」の舞台ともなった。意彥（仁賢天皇）・袁彥（顕宗天皇）の二皇子と国造許麻の娘根日女との婚姻にまつわる伝承が残り、根日女の墓とされる玉丘古墳をはじめとした古墳群がその姿を留めるだけでなく、今も『播磨国風土記』にまつわる多くの地名や伝承が伝えられている。

また、播州平野の中央部に立地することから、古代より、川や街道で瀬戸内海や日本海、京都や神戸、大阪、高砂、姫路など多くの地域との交流が繰り返されてきた。

川や街道を通じた交流が加西の特徴となる様々な歴史文化の形成につながった。

その一つが、石の文化である。高室と長から産出される石材を用いた石棺材を周辺に供給し、さらには石棺を石仏等に転用するなど古代と中世信仰が融合した石の文化、五百羅漢に代表される素朴な風合いの石仏群、近代まで続く建築部材利用など、独特な石の文化をつくりあげてきた。

中世に始まった、西国三十三所第二十六番札所一乗寺への観音巡礼や酒見講など、培われた高度な仏教文化が、近世に活発化し交流を生み出し、文化や流行りを加西にもたらした。一方、高室の芝居座が全国を巡り、加西発の楽しみを各地に広めた。

時代が下ると、瀬戸内海臨海部に近いことから、臨海部の政治や産業、軍事の拠点を支える後背地としての役割を担い、わが国の戦争史の重要な断片を構成してきた。

その一つが、ドイツとオーストリア＝ハンガリーの兵士を収容する青野原捕虜収容所である。また、姫路海軍航空隊が鶉野で開隊したことを受けて建設された鶉野飛行場の滑走路などの近代戦争遺跡が残されている。これらは、いずれも国際的な平和学習の拠点となっている。

一方、人々の暮らしをみると、数多くの農業用ため池は、貴重な水源として農家の人々によって大切に受け継がれ、耕作地に均一に水を供給する役目を果たしてきた。

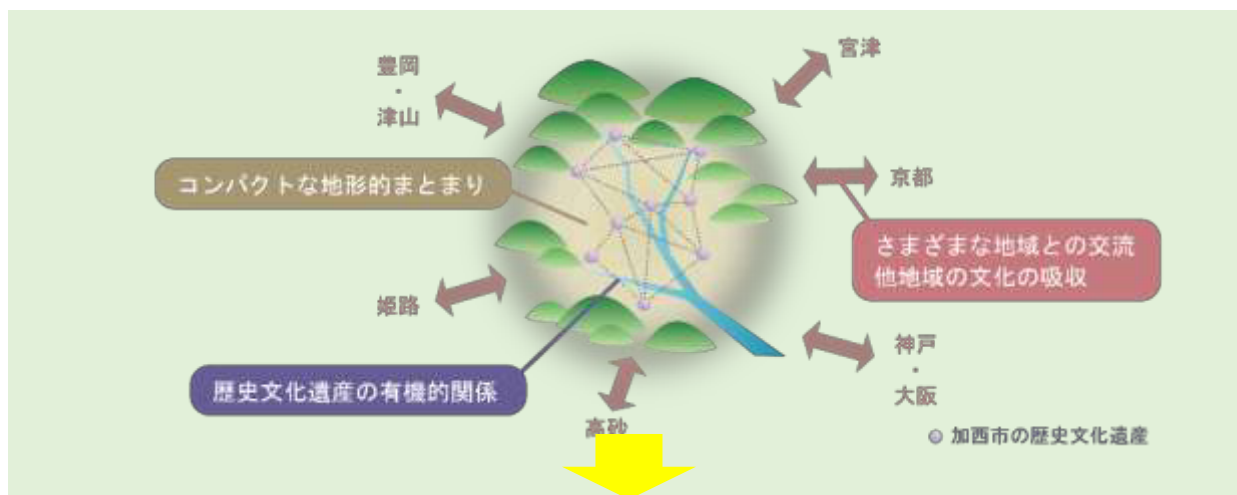
また、近世以降、在地領主の不在が、地域の自治精神を育み、人と人との絆を深めながら、村の氏神祭礼・年中行事等を大切に受け継いできた。

このように、台地や丘陵地に囲まれた平地で構成されるコンパクトな地形的まとまりを活かし、さまざまなひと・もの・こと（歴史文化遺産）が、道や川を通じた多様な交流により周辺地域の文化を取り入れながら発展し続け、古代から現代まで継承されてきた加西市。

それらの歴史文化遺産が有機的に関係し、「播磨国風土記」に象徴される文化、五百羅漢ごひやくらかんに象徴される石の文化、平和学習の拠点となる戦跡、多くのため池などの歴史文化遺産が、加西市ならではの個性豊かな歴史文化を複層的に育んできた。

以上のことから、加西市では、

- この地の地勢から生まれた石の文化や自然の恵みを活かし、自然への畏敬の念をもつ人々の営みがつくりだす歴史文化
 - 播磨国風土記や街道の往来により生まれた多様な歴史文化遺産がつくりだす固有の歴史文化
 - 仏教文化の興隆や氏神信仰・大戦の記憶の継承の心を伝える歴史文化
- が一体となって、独特の歴史文化がつくりだされてきたといえる。



加西市の歴史文化の特徴

- この地の地勢から生まれた石の文化や自然の恵みを活かし、自然への畏敬の念をもつ人々の営みがつくりだす歴史文化
 - 播磨国風土記や街道の往来により生まれた多様な歴史文化遺産がつくりだす固有の歴史文化
 - 仏教文化の興隆や氏神信仰・大戦の記憶の継承の心を伝える歴史文化
- ◎それぞれの要素を抽出し「3つのテーマ」「9つの歴史文化ストーリー」の「加西市関連文化財群」に再構築

図 3-1-1 加西市の歴史文化の特徴（概念図）